

二〇二四年五月一〇日

溪谷の人寄せ付けぬ落椿
鏝広の帽子取り出す薄暑かな

うつぎ
澄子

二〇二四年五月九日

こつせんと青天井や若葉谷
夕風をいなし玉解く芭蕉かな

たか子
むべ

二〇二四年五月八日

苔清水受けて祠の閑伽の水
姿見に左見右見しつ衣更え
この山の主てふ椎の若葉映ゆ
一万歩までと励みぬ薫風裡
白滝の樹間に見ゆる深山道

うつぎ
たか子
明日香
せつ子
あひる

二〇二四年五月七日

囀の枝移りせる大樹かな
森統ぶるやに老鶯の叫びけり
清流を跨ぐ倒木苔の花
ブラウスの中通り抜く若葉風
水満ちて代田に風の生まれけり
黄菖蒲の一叢池畔明るうす
砲弾のごとき筍釜茹でに
円墳の裾野はなべて苜蓿
トンネルを出れば終点若葉山

康子
むべ
ぼんこ
かえる
澄子
むべ
えいじ
風民
あひる

二〇二四年五月六日

杉木立樹間斜めに縫ふ春日
顔近く寄せれば翳る白牡丹
隆々と雲の湧くごと樟若葉
芝桜遠山並へひろごりて
雲近き村と人言ふ山若葉

かえる
うつぎ
むべ
かえる
風民

二〇二四年五月五日

菖蒲湯に長寿を願ふ老二人
広々と富士を映せる代田かな
この村の命育む山清水
玉ねぎの匂ひ消えぬ手収穫日
花疲れ居眠る犬に吾も添ひ寝
諸手あげ幼の潜るバラアーチ

きよえ
澄子
かえる
千鶴
かえる
せつ子

二〇二四年五月四日

木道の組木にのぞく山すみれ
鶯や父の遺影に小窓開け
夜蛙に眠り誘はれ旅枕
若葉してよき影落とす大櫓

むべ
むべ
かえる
風民

毎日句会みのる選・二〇二四年五月一二日